

2026 年 8 月 10 日

AI は相場の「次の暴落」に人間より先に気づくのか

～ニュース解析で探る、相場予測の実力と落とし穴～

政策調査部 主席研究員 柏村 祐

(要旨)

- AI がニュースから「危機の予兆」を体系的に抽出し、プロ投資家の行動の相当な部分まで先読みできるようになった今、金融市場は従前より安全になるという期待が高まっている。しかし、危機を予知する AI が普及すればするほど、市場はかえって「新たな暴落リスク」を抱え込むというパラドックスも生じている。
- AI は、世界中の大量のニュースから金融市場を揺らす出来事の発生確率と深刻度を抽出し、危機の予兆を可視化する。また、ファンドマネジャーの過去の売買パターンから、次を取る行動を高い中率（71%）で予測できる。
- 一方で、危険を察知する AI は、同質的なアルゴリズムによって一斉に売りに走り、価格下落を増幅する破壊者にもなり得る。AI の速さは、危機を早く見つける強みであると同時に、価格下落を速める弱点にもなる。
- AI 主導相場において、投資家に求められるのは AI の予測を盲信することではない。AI の「一斉売り」を流動性提供の機会とする逆張り戦略や、自身の投資行動が AI に予測されやすいパターンに陥っていないかを点検するメタ認知の視点が必要である。

1. AIは市場の救世主か、それとも破壊者か？

金融市場では、人工知能（AI）の活用が急速に広がっている。AIは、膨大なニュースや経済指標を短時間で分析し、市場のさまざまな動きのつながりを読み取ることができる。こうしたAIの活用は、もはや一部の高度なデータ分析を行う投資ファンドだけに限られたものではない。生成AIの普及により、あらゆる市場参加者が高度な分析ツールを手にしつつある。ここで一つの仮説が浮かび上がる。「もし、市場参加者の多くが優秀なAIを活用し、リスクの兆しを早期に察知できるようになれば、金融市場は従前より安全になるのではないか？」という期待だ。過去の金融危機は、人間の見落としや思い込み、あるいは根拠なき熱狂によって引き起こされてきた。そうであれば、冷静かつ客観的に大量のデータを分析するAIが市場の監視役となることで、バブルの膨張や突然の暴落を未然に防げるのではないか。これは、AIを金融市場の「救世主」とみなす考え方である。

しかし、金融市場の歴史は、新しいテクノロジーが常に予期せぬ副作用をもたらしてきたことを証明している。全員が同じように「賢いAI」を用いてリスクを回避しようとしたとき、市場には何が起きるのか。

本稿では、「AIは相場の『次の暴落』に人間より先に気づくのか？」というテーマのもと、最新の研究動向からAIの相場予測の実力を検証する。そして、AIがニュースから危機の予兆を見つけ出し、プロ投資家の行動さえ先読みする能力を持ちつつある現状を明らかにする。その上で、「危機を予知するAIが普及すればするほど、なぜ市場はかえって『新たな暴落リスク』を抱えることになるのか」というパラドックスを読み解き、AIが相場を動かす時代において、投資家がどのように備えるべきかを考えていきたい。

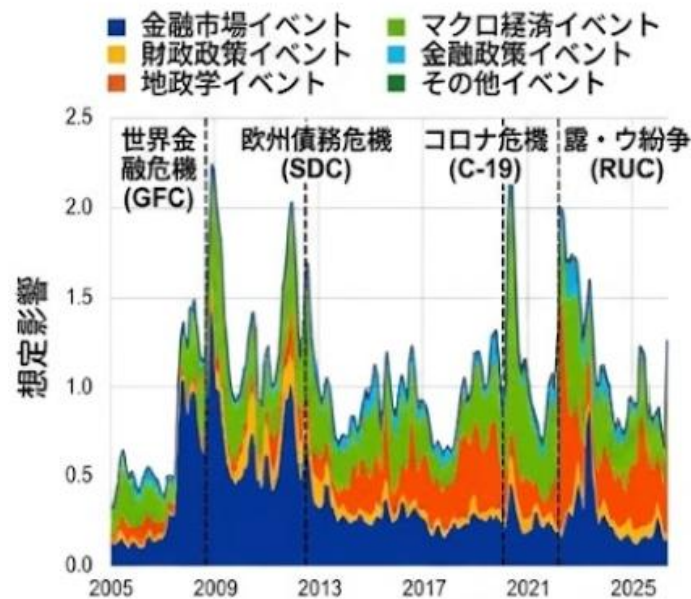
2. AIは市場の危機をどう捉え、どう動くのか

(1) AIはニュースに潜む「危機の予兆」を見つける

金融市場における「次の暴落」を予測することは、古くから市場参加者の悲願であった。しかし、ショックの発生タイミングをピンポイントで当てることは不可能に近い。そこで現在、AIを活用して試みられているのは、未来を予言することではなく、世界中の膨大なテキストデータから「危機の予兆（脆弱性とトリガー）」を早期に抽出し、可視化することである。

欧州中央銀行（ECB）が2026年に公表したレポートでは、大規模言語モデル（LLM）を用いて『Financial Times』紙の約110万本に及ぶ過去の記事を解析し、金融安定性を脅かす潜在的なトリガーの「深刻度」と「発生確率」を組み合わせた「SPOT（Severity and Probability of Triggers）指標」を構築した。この指標の推移を見ると、AIがニュースの文脈から、金融安定を揺るがし得る潜在的なトリガーの高まりを捉えていることがわかる。資料1が示す通り、2008年の世界金融危機（GFC）、2011年の欧州債務危機（SDC）、2020年のコロナ危機（C-19）、そして2022年のロシア・ウクライナ紛争（RUC）といった主要な危機イベントに先立つ局面でSPOT指標は上昇し、危機の発生時点付近で明確なピークを示している。AIは、人間が日々消化しきれない膨大なニュースの海から、市場を揺るがす材料の蓄積を継続的かつ客観的にスコアリングできる。危機の発生日を正確に特定できるわけではないものの、人間が見落としやすいリスクの蓄積を早期に警告する指標として、既存の定量指標を強力に補完する役割を果たし始めている。

資料1 基準 SPOT 指標の分解



(注) 黒の破線は、世界金融危機(GFC)、欧州債務危機(SDC)、コロナ危機(C-19)、ロシア・ウクライナ紛争(RUC)を示す。

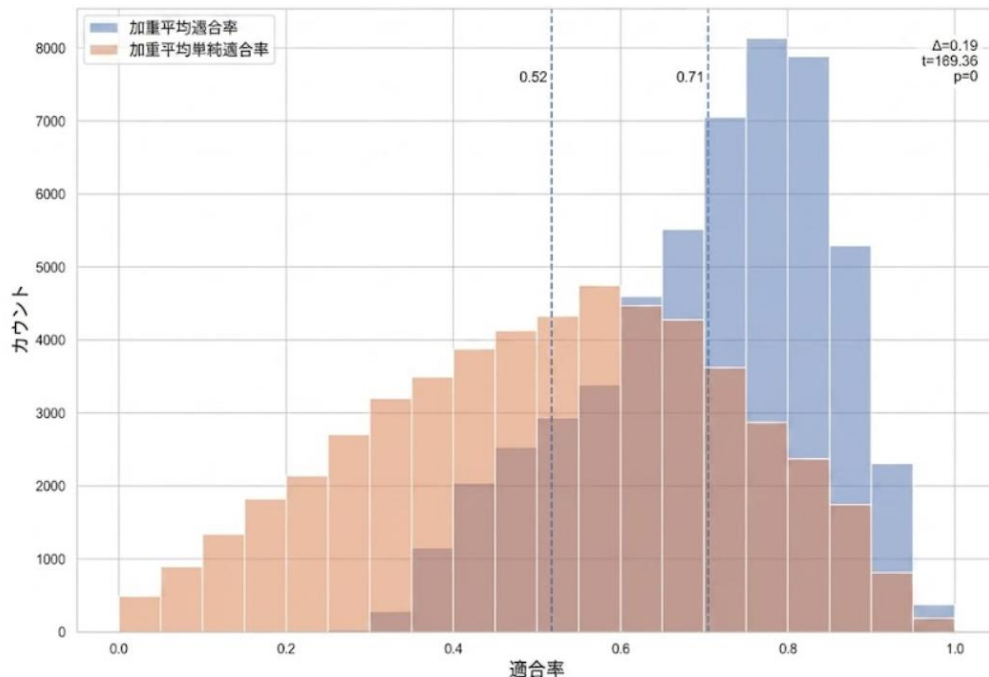
(出所) European Central Bank, “From dictionaries to AI: a new era in sentiment analysis for financial stability” より第一ライフ資産運用経済研究所作成

(2) AIはプロ投資家の「売買の型」を見抜ける

相場の急変は、ニュースという「事実」そのものだけでなく、それを受けた投資家が「どう行動するか」によって引き起こされる。市場参加者の行動パターンを事前に読むことができれば、ニュースや市場環境の変化が実際の売買にどう波及するかを考える手掛かりになる。最新のAIは、この領域に踏み込みつつある。

全米経済研究所(NBER)が2026年に公表したワーキングペーパー“Mimicking Finance”は、AIがプロのファンドマネジャーの行動をいかに正確に模倣できるかを実証した。研究チームは、アクティブ株式ファンドマネジャーの過去の保有銘柄や売買履歴、市場環境などのデータを用いてAI(LSTMモデル)を訓練し、彼らが次の四半期に各銘柄を「買うか、売るか、保有し続けるか」を予測させた。結果は明確であった。過去に最も多かった行動をそのまま当てはめるだけの単純予測の的中率(予測が実際の売買と一致した割合)が平均52%であったのに対し、AIモデルは平均71%の的中率でファンドマネジャーの売買方向を言い当てたのである。資料2を見ると、AIモデルによる的中率(青色)の分布が、単純予測(オレンジ色)に比べて右側(的中率が高い側)へ大きくシフトしていることがわかる。マネジャーによっては、四半期中のほぼすべての取引が予測可能であった。これは、AIがファンドマネジャーの「売買の型(クセ)」を学習し、特定の市場環境下で彼らがどう動くかを先回りして推定できることを意味する。つまり、AIはニュースから危機を察知するだけでなく、米国のアクティブ株式ファンドについては、ファンドマネジャーがどう反応し、ポジションをどのように変えるかを、相当程度まで事前に推定できる段階に入りつつある。

資料 2 売買予測の的中率の分布: AI モデルと単純予測の比較



(注) 縦の破線はそれぞれの平均値を示す。青色は AI モデル(加重平均正解率)、オレンジ色は単純予測(加重平均単純正解率)の分布。

(出所) Cohen, Lu and Nguyen, “Mimicking Finance, NBER Working Paper No. 34849” より第一ライフ資産運用経済研究所作成

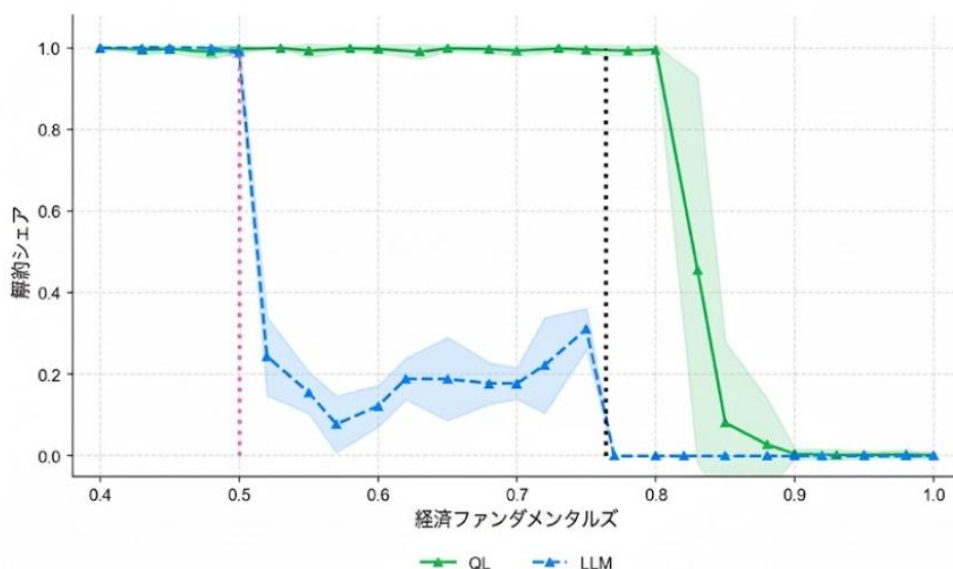
(3) 危険を察知するAIは「一斉に売るAI」にもなる

AIが危機の予兆を捉え、他者の行動を予測できるとすれば、市場はより安全になるのだろうか。現実はその単純ではない。AIの圧倒的な情報処理能力と反応速度は、危機を早く見つける強みであると同時に、価格下落を瞬時に増幅させる弱点にもなり得るからだ。

ECBが2026年に公表した別のレポートでは、AIの意思決定アルゴリズムの違いが金融安定性を与える影響をシミュレーションしている。この実験では、投資信託の解約（売り）行動において、強化学習の一種である「Qラーニング型AI」と、文脈推論を行う「LLM型AI」の挙動を比較した。資料3が示す通り、Qラーニング型AI（緑線）は、経済ファンダメンタルズが良好で本来なら解約が正当化されない状況（資料3の右側）であっても、すべてのAIが一斉に解約に走るといって、極端な「取り付け騒ぎ（Bank run）」のような動態を示した。これは、試行錯誤の中でデフォルトを経験するたびに、保有を続けることへの評価が低下し、小さくても確実なリターンを得られる解約を選びやすくなる学習パターン（Hot stove effect）によるものである。一方、LLM型AI（青線）は良好な局面での一斉解約は避けられたものの、ファンダメンタルズが中間的な局面ではAI同士の「信念」がばらつき、予測不可能なノイズを生み出した。この結果が示唆するのは、AIのアーキテクチャそのものが新たな金融不安の要因になり得るという事実である。似た設計を持ち、同じ目標（利益の最大化や損失の回避）を追求するAIが、同じ市場環境で広く利用されれば、あるネガティブなニュースに対して一斉に「売り」の判断を下すリスクが高まる。AIは「次

の暴落」に人間より先に気づくかもしれないが、その気づきがAI同士の連鎖的な売りを誘発し、結果として、取り付け騒ぎ型の一斉解約を通じ、価格下落の引き金や増幅要因になり得る。

資料3 経済ファンダメンタルズの水準とAI投資家の解約率



..... 債務超過危機：解約がなくてもファンドが破綻する 危機なし：全額解約があってもファンドは常に存続する

(注)ピンクの点線は解約がなくてもファンドが破綻する債務超過危機の水準、黒の点線は全額解約があってもファンドは常に存続する危機なしの水準を示す。

(出所) European Central Bank, “Financial stability in the age of artificial intelligence: the role of algorithmic architecture, Research Bulletin No. 143”より第一ライフ資産運用経済研究所作成

3. 投資家に求められるのはAIの盲信ではなく「一斉売り」の逆張り活用

ここまでの検討を踏まえると、「AIは市場の救世主となるのか？」という問いに対する結論は、「救世主となり得る一方で、その能力が高まるほど、新たな暴落リスクを生み出す危険性も増す」というものである。第2章で見たように、AIはニュースの文脈から潜在的なリスクを抽出し、市場参加者の行動パターンを高精度で予測する能力をすでに獲得しつつある。個別の投資家にとって、AIは間違いなく強力なリスク回避のツールである。しかし、市場全体を見渡すと評価は変わる。多くの投資家が似たようなアーキテクチャのAIを用い、同じニュースデータセットを解析して「売り」のシグナルを受け取った場合、AIは人間の恐怖やパニックとは無縁だが、アルゴリズムの同質性ゆえに「冷徹かつ一斉に」売り注文を出す。つまり、次の暴落では、人間のパニックだけでなく、AIによる過剰なリスク回避行動の連鎖が、価格下落を増幅する可能性がある。AIは危機を予知するがゆえに、自ら「破壊者」に転じ得るのである。

では、このようなAI主導の市場において、人間の投資家はどのような戦略をとるべきか。AIとスピードや情報処理能力を競っても優位は得られない。求められるのは、AIが苦手とする領域と、AIの行動パターンを踏まえた対応である。

第一に、AIの「一斉売り（オーバーシュート）」を流動性提供の機会とすることである。同質的

なアルゴリズムを用いる AI が一斉に売りに走る局面では、価格下落が短期間に増幅され、価格がファンダメンタルズから大きく乖離する可能性がある。投資家は、AI のシグナルに追随してパニック売りに参加するのではなく、あらかじめ十分なキャッシュポジションを確保しておき、AI による一斉売りで価格がファンダメンタルズから大きく乖離した場合には、買い機会として検討するという逆張りの視点を持つことが重要である。

第二に、自身の投資行動の「予測可能性」を点検することである。AI は過去のパターンから人間の行動を高精度で予測する。もし自身の運用スタイルが、特定の指標やニュースに対して常に同じ反応を示す「ルーティン化」されたものであれば、その行動は AI に模倣されやすくなり、運用上の独自性や超過収益の源泉が薄れるおそれがある。そのため投資家は、自らのポートフォリオや売買ルールが「AI にとって予測しやすいもの」になっていないかを定期的に点検する必要がある。機械的な売買ルールに過度に依存せず、判断の前提を見直すとともに、AI では捉えにくい定性的な情報や、過去のパターンには当てはまりにくい変化にも目を向けることが重要である。

AI は市場の不確実性を排除するツールではない。AI が新たな市場のメインプレーヤーとなる時代において、投資家に真に求められるのは、AI の予測を盲信することではなく、「AI がどのように間違い、どのように暴走するのか」を見極め、その先に生じる市場の歪みを収益機会へと変えていく視点である。AI を使いこなす力だけでなく、AI そのものを一步引いて捉える「メタ認知」の視点こそが、これからの投資家に求められるのである。

以 上

【参考文献】

- ・European Central Bank (2026) "From dictionaries to AI: a new era in sentiment analysis for financial stability", Financial Stability Review, May 2026.
- ・Cohen, L., Lu, Y., and Nguyen, Q. H. (2026) "Mimicking Finance", NBER Working Paper No. 34849.
- ・European Central Bank (2026) "Financial stability in the age of artificial intelligence: the role of algorithmic architecture", Research Bulletin No. 143.